

# 浅草寺病院だより

2021年  
【秋号】

2021年10月10日発行  
社会福祉法人浅草寺病院  
東京都台東区浅草2-30-17  
☎ 03-3841-3330

## 理念

観音さまの大慈悲のみこころにそって、  
思いやりの精神のもとにあたためた医療を提供します。



## クラウドファンディング・ご寄付のお礼

この度は皆様から多大なご厚志、ご支援を頂戴し、心より感謝申し上げます。当院としても、皆様に住み慣れた浅草の町での生活を安心して継続できるように、地域医療に取り組んで参ります。今後ともよろしく願い申し上げます。

理事長 大森 和潮

病院長 黒田 忠英

## 尊いご寄附をいただき誠にありがとうございます

副院長 中山 智子

多くのご寄附、ご支援をいただきました方々への感謝の気持ちとして、病院スタッフ一同の思いを含めご挨拶させていただきます。

2019年12月に原因不明の恐ろしい肺炎を引き起こすウイルス感染症が中国で確認され、そのウイルスの名は新型コロナウイルス(COVID-19)と命名されました。当初、浅草はオリンピック2020年招致でにぎわい、特に外国人が集中して訪れるはずであったため、この感染症は対岸のこととして考えておりました。しかし、予想外にコロナウイルスの感染が広まり、政府の緊急事態宣言の発出により浅草の街には観光客が途絶える事態となりました。観光とは直接関係のない当院も、病院＝コロナがいるかもしれない、との恐れや風評、また比較的早い時期に台東区内で基幹病院のクラスター発生や入院患者様の死亡例が報道されたことで、病院への受診控えが急激に進み、2020年に入ってから、きわめて深刻な収支状況に陥ることになりました。母体である浅草寺にもお助けいただきましたが、浅草寺へ参拝される方の激減もあり、なんとか病院独自でも地域医療を継続すべく、生き延びるための方策をとらねばならないとの危機感・緊張感を持ちました。

病院としては初めての取り組みである、「ご寄附のお願い」をさせていただくことに至りました。ご寄附をつくる方法として「クラウドファンディング」という方法をとらせていただきました。

クラウドファンディングとは、「群衆＝クラウド」と、「資金調達＝ファンディング」を組み合わせた造語で、「インターネットを介して不特定多数の方々から少額ずつ資金を調達する」ことを指します。インターネットの普及により2000年代のアメリカで始まりました。アメリカでは主に新規事業に関して賛同する方への資金の調達方法として始まりました。日本では2011年の東日本大震災の年から、資金調達の手段ではなく、「インターネットを通して困った方々へ寄附をする際の新たな手法」として認識され、広まった経緯があります。

インターネットを介しての手法であったため、当院に通院される年齢層としては不向きではないか、との意見もありましたが、院内での協議を重ね、2か月間の寄附期間に限定し導入することといたしました。

結果はどうだったのかと申しますと、クラウドファンディングとして募った目標金額にはかなり満たなかったものの、一方では浅草寺病院のことを心配し、「病院が困っているようなので寄附したい」、「コンピュータやスマホはわからないけど寄附します」など、非常に温かいお言葉とともに、病院窓口へ直接ご寄附をお持ちいただく方も多数いらっしゃいました。皆様、浅草寺病院をお救いいただくためにご尽力くださり、そして多くのご指南も頂戴いたしました。本当にありがたく思っております。

ちなみに、「クラウドファンディング」という言葉は新しい言葉ですが、不特定多数の方々から資金を募り、何かを実現させる手法としては古くから存在していました。日本では寺院や仏像などを造営・修復する際に個人から寄附を求める「勧進(かんじん)」がその例です。

今回、インターネットでのクラウドファンディングへのご寄附をはじめ、窓口へ直接ご寄附いただきました方など、すべての皆様方に深く、深く感謝申し上げます。当院への尊いご寄附を地域医療への貢献として反映させていきたいと考えます。ご寄附いただきました多くの方々から、「浅草寺病院には存続してほしい」、「浅草寺病院にかかり続けたい」、「住み慣れた浅草の町で暮らしたい」など多くの温かいお言葉をいただきました。

今後は、浅草、台東区にお住いの多くの方々が、住み慣れた環境で生活し続けられるよう、在宅訪問診療などにも取り組んでいきたいと考えております。外来、入院そして在宅訪問診療の3本柱で、ご支援をいただいた皆様をはじめ地域の方々が安心して暮らせるよう地域医療に取り組む所存であります。よりよい地域医療を提供できるように院長をはじめ全職員一丸となって、頑張っております。どうぞよろしく願いいたします。

## 体温の話

内科 岩崎功明

コロナ禍も、1年以上経過しましたが、日々自身の体温が気にならない日はないでしょう。人間は、哺乳類であり環境温の変化によらず体温を一定に保つことが可能な恒温動物です。従って、体温が高温になったり、低温になったりとは体調変化の指標になります。17世紀イタリアの医師・サントリオが体温測定したのが、体温測定の始まりとされており、日本では1768年に平賀源内が温度計を制作し、1826年に医師・稲沢宗庵が臨床で体温測定したと伝えられております。

では、体温はどこの温度を表しているのでしょうか？

体温は体表面の温度である末梢温と体の中心部、中枢温(核心温)に分けられます。末梢温は、皮膚温を示し、中枢温は、鼓膜温、食道温、膀胱温、直腸温、血液温になります。皮膚温は、気温など環境温に影響されやすく、中枢温より低く測定される傾向にあります。例えば、中枢温が37度でも外気が冷環境であれば、皮膚温が28度を示す場合もあります。日常的に使用される体温計は、腋窩(脇の下)に温度計を挿入し、脇を閉じることで外気に影響されないような熱遮蔽で測定することで、中枢温に近い温度になります。ただし、厳密な意味では、10分以上脇を閉じないと、熱遮蔽状態になりません。各体温計メーカーは、膨大な温度測定結果から、体温上昇度を分析・演算することで、数十秒で予測検温できるような体温計を商品化しています。

予測検温とは、計算上これ以上上昇しないとされた温度(平衡温)が示されています。各メーカーとも、機器の性能は向上し、短時間に測定が可能になりましたが、測定前に脇の汗は拭き取る、脇はしっかり閉じるなどは、正確な体温測定に重要となります。

